OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	創造と想起 : 可能的ベルクソニズム
Author(s)	戸島, 貴代志
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44726
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏名	戸島貴代志
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 18180 号
学位授与年月日	平成15年10月2日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	創造と想起－可能的ベルクソニズム－
論文審査委員	（主査） 教授 山形 頼洋 （副査） 教授 溝口 宏平　助教授 入江 幸男

論文内容の要旨

本論文はベルクソンの生の哲学とハイデガーの存在の問いとを対象とする比較論である。両者の比較を通して、ハイデガーの哲学に潜む内的制約をくぐる仕方でベルクソン哲学の内的可能性を際立たせることが本論文の目標であると標榜される。

ベルクソンとハイデガーはともに、時をめぐる問題意識から出発し、生を具体的に記述することを企てた。理知的・理論的なもの、すなわち、学や観念の覆いを取り払って、事象をそのあるがままの姿において経験することを目指すその態度によって、ベルクソンとハイデガーのそれぞれの思惟はその出発点においてある種の類縁性を共有している。両哲学者の間に見出される類縁性を確認しながら、他方で、比較すべき論点に関して、まず、両哲学の独自性を明らかにし、その後、両者に対してある一つの視点を設定してつき合わせるというのが、本論文が取った論述上の手順である。具体的には、本論文は「緒論」、「各論」、「結語」の三部構成からなる。「緒論」で比較の全体像が提示され、これを受けて「各論」第一部においてベルクソンが、第二部においてハイデガーが、比較されるべき論点に関して、詳細に論じられる。「各論」の第三部は、第一部と第二部とを総合して、「場所性－場所論性」という論者の視点からベルクソンとハイデガーとを評定する比較論となっている。

ベルクソンとハイデガーを比較するために申請者が採った中心をなす論点について述べよう。両哲学者とも、事実をありのままに捉えようとするその態度においては一致しているが、ありのままの事象とは何かという点では異なっている。ベルクソンにとってréalitéとは生のことに他ならないのに対して、ハイデガーにとってSacheとは存在(Seinないしは Seyn) を意味する。ところで、存在は、存在への問いを問いうる人間がそうである現存在において開示されるが、この現存在の開示性は、現存在がその実存論的構造において「死への存在」ないしは「死すべきもの」であるという点に存している。ここから、両哲学における事象の違いは、生と死との違いとして理解されるべきである。というのも、ベルクソンの生の哲学にとって、死は積極的な意味をもち得ないからである。死はたかだか個体の死にすぎず、個体は生命の躍動の通過点でしかない。さらに、生の反対概念として死をも包摂する物質にしても、自己形成の運動である生がその形成の運動を中断するや否や生起する自己解体の運動である限り、生の欠如態として消極的な存在に過ぎない。ベルクソンにとっては生あっての死であり、ハイデガーにとっては死あっての生である。

また、事象と思惟との関係において、ベルクソンの場合は、生についての思惟は、生が生そのものへ立ち返り、生の一部となることである。これに対してハイデガーの場合は、存在についての思惟は、死への先駆的決意性のもとで改めて存在へと開かれ、存在を受け入れるのでなければならないので、どこまでも存在と思惟との乖離に甘んじなけ

ればならない。ベルクソンにおける生についての思惟は、生が自己自身へ帰ることであるから、その思惟は生に対して透明な思惟である。このようなベルクソンの生の思惟を、論者は、自分の「おいてある」場所を語るのではなくてそのまま示す非場所論的思惟と名づける。これに対して、『存在と時間』における存在が思惟に「おいてある」超越論的なハイデガーの存在の思惟は、存在がそこにある思惟について語る思惟であるがゆえに、場所論的思惟と呼ばれる。しかし、後期ハイデガーにおいては、存在においてある非場所論的思惟が、歴史としての存在に「おいてある」として取り戻される。加えて、「集－立」としての存在への人間の帰属のうちには、同時に、アレテイアの生起への、人間のある意味での創造的な関与が含まれている。また、ベルクソンの生の非場所論的思惟においても、思惟が生に、創造的生に、透明になるためには観るために観る直観として、生に自然な実践的関心を払拭して事象である生を受容しなければならない。ベルクソンにしてもハイデガーにしても、思惟と事象との働き合いに基づく「受容における創造」が問題であり、ベルクソンはそれを創造の面から、ハイデガーは受容の面から語った。

論文審査の結果の要旨

一人だけ取り出して論じても多大の労力を要する 20 世紀を代表する二人の哲学者を比較するという力技である。しかも、ハイデガーの精緻な存在論・時間論からは通常素朴すぎると見られているベルクソンの生の哲学を、ハイデガーの存在論と同等に扱い、両者の類縁性から出発して比較を行い、その上、ベルクソン哲学の持つ単純さ、生の肯定に基づく楽観主義をハイデガーの存在への問いを補うものとして評価する点で、本論文は独自性を発揮している。このような比較が可能になったのは、論者が、生と死という観点を弁別の観点として採用し、両哲学者の複雑で容易には他の哲学の概念体系を寄せ付けない時間についての考察を遠望できる地点を獲得しえたからに他ならない。この着眼点によって、論者は両哲学の比較に必要な物差しを手に入れることができた。しかし他方、この物差しの寸法に合うように両哲学が裁断されて、平準化された結果、細部の解釈にある種の無理強いが生じているのも否めない事実である。同じ理由から、内容を曖昧にした比較が行われていると思われる場合もある。たとえば、場所論的比較がそうである。直観と超越との比較として、正面から扱うべき論点ではないのか。また、本論文に言う可能的ベルクソニズムがどのようにハイデガー後期思想の「集－立」と関係するのか、論述にもう一工夫あるべきであった。しかしながら、いくらかの問題点を残しながらも、本論文が、その独創性ゆえに比較を拒絶するように見える二つの哲学を、適切な見通しのもと、比較可能な場所に導きいれたことの意義は大きい。本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値すると認定する。